メリヤスのシヤツとサルマタを、白いネルの襦袢と腰卷とに隆明君に替えて貰つた事も忘れられない。

僕は實際に海の上を歩るく事位は平氣だと言ふ樣な氣もしてゐた。

障子に嵌めてある硝子の割れ目から覗くと、女は着物を縫つてゐた手を休めて、ニツコリして僕を見た。

初めて寫眞で知つた女を訪ねて行つた時だ。

僕の名は知つてゐたので、頭が惡るくて東京から歸つて來た事など言つて、女がおぢいちやんと二人で暮らしてゐる事や、俳句が好ぎだとか、十四の年にチブスで死に掛けた事があるとか、兩親ともチブスで、顏も六に覺えない頃亡くなつたのだとか、二時間ばかり話をして歸つた。

其の翌日も僕は又行つた。

自轉車を、橋の下の規賢君の所へ預けておいて、日の暮れるまで居た。

黑い羊羹を切つたり、お茶やお菓子を出して、女は親切にやさしくもてなしてくれた。